花を見をりて　基　庸

あかず猶まもり暮さん櫻花年にふたゞびみるとなければ

回の字を和す

數ふれば花よりけなる齡かなはかなや春も幾めぐりぞと

春の字を和す

咲にほふ花をしみればいとゞなほ忍ぶにたへぬ故郷の春

閑の字を和す

駒とめて手折し花の春風はおとに聞くさへ長閑かりけり

あかず猶の返し

よしやよし年に幾度咲とてもあかれはすべき花の色かは

武城春望　此日過二木廟庵宗一　鳩巣

陌上烟霞眺朝平。山櫻花發自分明。滿川風雨舟緣岸。負郭樓臺水繞城。要路誰家車馬簇。儒門到處講論清。功名富貴終何益。只愧官浪未濯纓。

一、竹田三位卿添削の詠

去冬初雪の時分綴りし蜂腰數首、光英迄遣候處、竹田三位惟庸卿御合点今日落手。但別紙に書て合点せらる。

武藏の國に旅ゐし侍りける頃初雪の朝に

故郷の夢を殘しておき出る草のいほりの今朝のはつゆき

人とはぬ跡さへしるくさびしさの昨日に增る今朝の初雪

山家初雪

やま里の思ひわすれて待人もよもぎがもとの今朝の初雪

（いつはあどもとふたまつとしらせよ）

（といふ人をいとひて入し山里も忘れにけりな今朝の初雪）

朝雪

こころこそまづ散りまよへ朝日かげにほふ梢の雪の初花

月のいとおもしろかりけるを詠めゐてよみ侍ける。

武藏野や草はみながら埋もれて雪こそ月の宿りなりけれ

又むさし野にて初雪のふれるを見て。

きのふみし富士の高ねの白雪を嵐やさそふ武藏野のはら

むらさきのはつもとゆひや武藏野の行末遠くふれる白雪

一、室直清より消息

十五日。直清より消息。頃日重て木老師へまかりて侍るに、さきにみし花も散りはて、世路に春をもしらで過行き侍る事歎かしく、馬上にてかく詠つるのよし。

山櫻曾見發花新。今日重來半委塵。何事東西車馬客。往還世路不知春。



末字を和して遣す

夢かとよいくかもあらで散り盡す花にぞ思ふ行末のはる

一、杜鵑の歌

廿一日。人々ほと、ぎす聞侍るよしかたり侍るに、いまだきかざりければ。

なほざりに待もやせじと宵々のかへりみだるゝ郭公かな

廿三日。ほと、ぎすの初音聞侍りけるまゝ。

杜鵑彌生の空に聞しかどあやめもかをるこゝちこそすれ

さりし頃常照院へ遣し候二首。

御庭の櫻花しひて申うけ侍りけるまゝ、聊謝し申侍るとて。

いまぞしる手折し花の色に香にをしみし人の心づくしを

一えだの花の色香にふれしよりなほ忍ばるゝにはの春風

一、湯島聖廟へ獻詠

廿五日。湯嶋聖廟へ三首の和歌奉之。祈公家繁榮之事。且於入木道并和歌道。所懇祈其冥加也。

春日陪聖廟詠三首和歌　藤原　昌興

社頭梅

のどけしな春のひかりもみづ墻に花さき初るむめの下風

月前霞

ふく風も心やせまし山の端の月に色そふ夜半のかすみを

寄松祝

生そひて猶も榮ゆく松が枝は幾たび千代の春をしらまし

尤參拜の儀雖爲本意、依奉公の事不能其式、以家僕獻上青銅百疋添之。此頃右三首を二首宛詠之、他の異見をも尋之、右の三首に定めぬ。外の三首。

おのづから清きにうつる心かな神の御墻の梅かをるころ

風たゝで霞む雲井をゆく月のよにいひしらぬ春の夜の空

吹風の音ものどけきときは山まつも千年の陰をふかめて

一、山本基庸と贈答の歌

昨日法樂和歌の事、基庸へ其由啓し侍るとて、短冊に書てつかはしける。

道の冥加をいのり侍るとて。

かげたのむこゝろの水のにごらずばなほ行末の道守れ神

道を祈れる歌の返しとて。　基　庸

たのみなば神の心は水くきの清き流れにすむとこそきけ

ほと、ぎすの歌をも詠侍るとて。